

製炭工程②窯木割り まき割り

製炭におけるまき割りのことを窯木割り(かまいわり)といいます。両手で収まらない窯木をクサビと木槌を使ってちょうどよい太さに割る作業です。

木槌も4回作りました(作り方も使い方も悪いのかすぐ壊れてしまいます)。木槌の振り下ろし方も、肘から落としたり肩甲骨を上げてから降ろしたり膝を抜いたりしてより楽に割れるように試行錯誤しています。綺麗に割れたときの音や爽快感はたまらないです。



私が作成した木槌

越冬



冬の自宅前の様子

時山に来て7カ月、越冬もできたのでそろそろ時山について話す資格があるのかな?と思います(笑)

夏は蚊やヒル。秋はガメ(カメムシ)。冬は寒さと雪と鼠。いろんな障害(!?)がありましたが、それ以上に魅了させるものが時山にありました。日時や天候によって顔色を変える山々。未だに発見すると大騒ぎさせられる動きの美しい猿や鹿達。夜の明暗を分ける月明り。勤勉で温かい時山の方々との交流。毎日毎日小さな感動をたくさん頂いています。次はどんな春がやってくるのか楽しみです。

製炭師見習いとして

～防災の備蓄にぜひ炭を～

災害などでライフラインが止まった時、本当に困ってしまいます。復旧には程度や種類によりますが、東日本大震災では電気が1~2週間、ガスの復旧に2~3週間かかったところもあるようです。

炭は長期保存できる利点がある他に、簡易トイレの脱臭剤として、飲み水の簡易ろ過機として、もちろん、暖房や調理に様々な場面で使えます。

また、どれぐらいの量でどれぐらい温まれるか、どうすればより火持ちするか練習しておくといいですね。防災備蓄リストにぜひ炭とマッチも!



簡易ろ過機の例(国境なき医師団HPより)

裏面に新聞記事とお知らせが載っています



4日(土)	一之瀬地区	10:00~15:30
5日(日)		9:00~14:30
11日(土)	多良地区	9:00~15:00
12日(日)	時地区	9:00~16:30
	多良地区	9:00~15:00

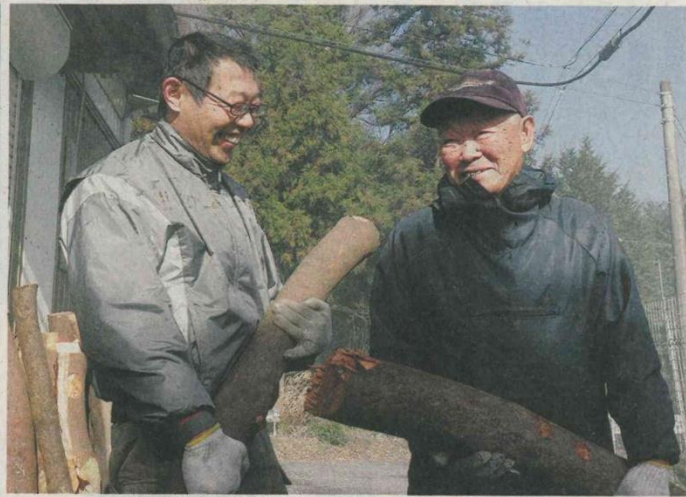
皆様のお立ち寄りをお待ちしております！

時山炭サポーターズクラブ会員も募集します！

消えかけた火 移住者つなぐ

大垣市上石津町の地域おこし協力隊として各務原市から移住した中村明弘さん(46)が、地域に伝わる炭焼き技術「時山炭」の担い手として奮闘している。町内で二人しかいない炭焼きの「師匠」の下、「伝統の重みを感じる日々。後世へバトンタッチの役割ができれば」と励む。消えかけた伝統の火をおこし、魅力を広げようとしている。(柳田瑞季)

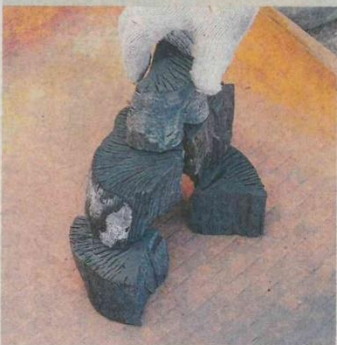
上石津の炭焼き技術「時山炭」



時山炭作りの師匠、川添さん(右)から技術を学ぶ中村さん(左)も大垣市上石津町細野で



煙が立ち上る炭焼き窯
①密度が高く、火持ちの良さが特徴の時山炭



もう一つと上がる煙を物ともせず、窯の火の様子を確かめる中村さん。その背中を、師匠の川添美治さん(61)が見守る。「非常に積極的で、何でも覚えようとする気持ちが素晴らしい」と中村さんの仕事ぶりに信頼を寄せた。

時山炭は古くからこの地域で盛んに作られていた。「門外不出」の伝統文化。寒さによりじっくりと成長し、年輪が細かく締まった木の炭は火持ちの良さが評判で、江戸時代には京都や名古屋にも販路を広げていたという。明治時代には上石津の製炭業者は三百人を超えていたが、昭和に入り

各務原出身の中村さん「恩返ししたい」

プロパンガスが普及したことにより、急速に衰退していった。

時山炭の文化が完全に途絶えてしまつたことを懸念した市が昨年、協力隊員を募集。応募し選ばれたのが、各務原市で鍼灸院を営んでいた中村さんだった。六年前に一度立ち寄った上石津の自然豊かな風景が忘れられず、家族とともに移住を決意。昨年八月から、時山炭の継承活動として、製炭に関する知識や技術を学んでいる。

「最初はこんなに本格的に炭作りに関わるとは思っていなかったというが、今では川添さんらの力を借りながら、チェーンソーで木を切る作業や窯に火を入れる作業を精力的にこなす。「協力隊通信」のチラシを作つて活動の様子を発信したり、地元イベントで炭を販売したりと、地域に新たな風を吹き込んでいる。

移住から約五カ月。「どんだん『山男』に近づいてきた」と笑つた中村さんは「時山の人にとってもお世話になってる。良い炭を作ること、恩返ししていきたい」と意欲を見せる。川添さんも「若い力で、時山炭を後の世まで伝えてほしい。志を貫いて」とエールを送る。